

四日市市男女共同参画課

男女共同参画社会をめざしての調査・研究委託事業

青少年の ワーク・ライフ・バランス に関する調査・研究



2008 年度

家族社会心理学研究所

はじめに

高校生の職業観は、成績や進路そして性別によっても異なることが、これまでの調査でも報告されています。たとえば、「自分で食べていける仕事につく」ことが「絶対できる」と思っている生徒は、成績上位群でやっと半数で、下位の生徒では3割にも満たない現状があります。

ここ数年の学校教育では、上記のような現状を受け、中学校を中心に、「総合的な学習の時間」で様々な職業について学んだり、就業体験(インターンシップ)を行ったりして、自分の将来について具体的に考える機会が与えられるようになってきています。近々自分の将来について具体的な方向性を決めていかななくてはならない高校生は、「働くこと」についてどのように考えているのでしょうか。

こういった問いに応えるための教育的努力や施策が進められている一方で、自分のライフスタイルとの関連性で就労をどのように捉えているのか、といった観点にはこれまであまり触れられてはきませんでした。就労とライフスタイルの調査研究は、ワーク・ライフ・バランスの観点から進められてはいますが、多くは既に就労している人を対象とするものです。自分と社会の接点を見極めることは、ライフスタイルを方向付けるうえで極めて重要な課題であり、生きる意欲の源泉である家族とその幸福にとっても、欠くことのできない課題です。

本調査は、現状の課題を受け、男女共同参画社会の実現に向け、四日市市男女共同参画推進条例に基づき、男女共同参画施策を総合的に推進するために、四日市市より調査・研究の委託を受けた、家族社会心理学研究所により実施されたものです。特に、四日市市男女共同参画推進条例第11条に定められている「家庭生活における活動及びその他の活動の両立支援」を目指す取組みとして、将来の職業人である青少年を対象として、就労と生活に関する意識を調査することを目的として実施されました。

調査の時期と協力校については、次のとおりです。実施時期 2008年9月～11月にかけて四日市市内に所在する、県立普通高校・県立工業高校・私立女子高校の3校に調査協力をいただきました。特に、就労に対する態度についての調査研究であることから、進路指導の多忙な時期に行われた調査は、3校の先生方の男女共同参画社会の実現についての深いご理解がなければ、実現できるものではありませんでした。また、進路選択に対して自分の問題として直面している3学年に在籍する生徒のみなさんの、大切な時間を割いてのご協力と誠実な取り組みは、単なるアンケートへの回答といった作業課題の意味だけではなく、再度自分のライフスタイルについて熟考する機会となったことが、アンケート後の感想として寄せられたことは望外の喜びでありました。生徒が学校で学ぶことは、将来「仕事」をすることと密接に関わっています。また、「仕事」をすることは、労働に対する妥当な報酬を得て個人が私生活でも幸福を追求することと連動しています。「仕事」と「私生活」のバランスをどのように考えればよいのかについて、進路の岐路に立つ高校生が一度立ち止まって考えることは、人生にとって意義のあることであつたと自負しております。

高校生といっても職業生活についての知識は分散しており、質問内容の理解について異なる解釈に基づいて回答することを避けるために、下記のように【資料】として、アンケート中の用語について説明をしました。

【資料】

「仕事と生活の調和(ワーク・ライフ・バランス)」とは、国民一人ひとりがやりがいや充実感を感じながら働き、仕事上の責任を果たすと共に、家庭や地域生活などにおいても、子育て期、中高年期といった人生の各段階に応じて多様な生き方が選択・実現できることです。

なお、以下の質問における用語の意味は次のとおりとします。

「仕事」;常勤(フルタイム)、パート、アルバイト、嘱託など就労形態には関わりなく、自営業主(農林漁業を含む)、家族従業者、雇用者として、週1時間以上働いていること。

「家庭生活」;家族と過ごすこと、家事(食事の支度・片付け、掃除、洗濯、買い物など)、育児、介護・看護など

「地域・個人の生活」;地域・社会活動(ボランティア活動、社会参加活動、交際・つきあいなど)、学習・研究(学業も含む)、趣味・娯楽、スポーツなど

「休養」;休養、睡眠、テレビ・ラジオ・新聞・雑誌などでくつろぐことなど

【実施スケジュール】

時期	内容	活動人数
2008年8月18日(月)	選考結果通知	
2008年8月22日(金)	公立工業高校調査依頼	1名
2008年8月27日(水)	第一回研究委員会	4名
8月27日~29日	質問紙原案作成 検討・校正・承認	4名
2008年8月30日(土)	質問紙印刷・綴じ	3名
2008年9月1日(月)	公立普通高校調査依頼、承認、実施	1名
2008年9月2日(火)	公立工業高校調査依頼	1名
9月1日~6日	公立普通高校調査結果データ入力	1名
2008年9月7日(日)	公立普通高校調査結果分析開始	1名
2008年9月12日(金)	公立工業高校調査実施	1名
9月12日~13日	公立工業高校調査結果データ入力	1名
2008年9月14日(日)	公立工業高校調査結果分析開始	1名
2008年10月21日(火)	私立女子高校調査依頼	1名
2008年11月15日(土)	私立女子高校調査紙回収	3名
11月16日~18日	私立女子高校調査結果データ入力	1名
2008年11月18日(火)	私立女子高校調査結果分析開始	1名
2008年11月23日(日)	関西大学へ文献研究の交通費	1名
2008年12月14日(日)	第二回研究委員会	4名
~2008年12月20日	文献検索	2名
	データ解析、報告書執筆	1名

目次

現代日本の混迷と働くことの意義の再発見	1
仕事と生活の調和（ワーク・ライフ・バランス）に関する専門調査会、 男女共同参画会議「平成19年7月」の結果から ワーク・ライフ・バランスを妨げる要因について	3
調査方法	6
第一部	
「高校生のWLBに対する態度の現状」 （基礎統計に基づく所属学校と性別による差異）	
1）「WLB」に対する認知の程度	8
2）高校生の「WLB」に対する態度	9
3）高校生から見た父親の「WLB」	10
4）高校生から見た母親の「WLB」	11
5）自分自身（高校生）の就職後の「WLB」実現可能性について	
5 - 1 家庭生活のための時間確保	13
5 - 2 地域活動のための時間確保	14
5 - 3 自分のための時間確保	15
5 - 4 休養のための時間確保	16
第二部	
WLBに対する態度と学校生活・家庭生活・性役割との関連性について	
第一部の基礎統計結果から	19
高校生のWLB態度の関連要因	
1）「社会的スキル」とWLB態度	19
2）青年期の家族関係と適応	21
3）支えあえる仲間の実感とWLBとの関連性	24
4）高校生の性役割感	26
5）心の問題に悩んだときにたすけを求める態度	28
総合的考察	30
編集後記	32

現代日本の混迷と働くことの意義の再発見

未曾有の不況の中で経験する未曾有の不安

2008年秋アメリカのリーマンブラザーズの経営破綻の報道から、瞬く間に世界中を100年に一度と言われる、まさしく未曾有の不況が襲った。アメリカと密接な関係をもつ日本、中でも特に自動車産業、世界的な市場をもつ企業は軒並み減産、人員の整理、などのリストラに躍起である。2008年の年の瀬の風景では、寒空に路頭に迷う解雇された人々の生活がテレビに毎日のように報道されていた。

規制緩和という名の、利益集中構造への社会変化の舵取りは、「金は力」「金をもうけるためには、手段は選ばない」、そして「勝ち組」「負け組」といった格差社会を生んだ。抜け目なく集金に成功した人は市井の人々を睥睨し、一方、勝ち組路線から外れてしまった人は、なかなかベンジは難しく無力感に支配され、パソコンや携帯電話を使ったインターネットの仮想現実逃避するか、ワーキングプアとよばれる過酷な生活に只管耐える日々しかない。

まじめに、こつこつと、それこそ家族や個人の付き合いは後回しにして、仕事に精を出してきた人が全く自己責任とは関わりない理由で解雇される。いったい何を信じて生きてゆけばいいのだろうか。否その前に私たちは、何を求めて生きているのだろうか。

一生懸命、滅私奉公、「こんな私でも、まじめにこつこつやっていたらきっと認められる日が来る」。しかし、それは幻想でしかなくなった。生涯雇用制度、年功序列は過去の遺物であり、現代の社会状況にはそぐわない。人間関係は希薄化し、安心して信頼しあえる仲間の形成など、流動率の組織改変がめまぐるしくなされる職場では難しい。何を頼りに生きればいいのか？不安は恐怖を生み、恐怖は疑心暗鬼を生む。そして、信じたくても怖くてだれも信じられなくなってきている現実がある。

近い将来社会人となり、日本をはじめ世界を支える若者たちは、この現状をどのように見ているのだろうか。日本の子どもの多くは高校に進学する(2008年97.8%)。そして、3年後には進路選択をしなければならない。すでに中学3年生時には、職業実践系の高校と進学を目指す普通高校の選択をしてはいるものの、昨今では、実業系高校でも進学率は高まるばかりである。これらの傾向は、先述の勝ち組になるための基礎資格として、「大卒」が想定されているからかもしれない。このことを裏づけするかのように、15歳~24歳(在学中を除く)の非正規従業員は約30%と、他のどの年齢層よりも高い(「労働力調査, 2007」)。

勝ち組とは、平たく言えば、違法性なく効率よく大金を手に入れた人たちのグループである。中高生とその保護者も、子どもの特性と学校の特性との適合性よりも、多くの場合、食いつぶぐれがないようにとの基準で進路を選択する。殆どの人がこの選択が人の幸福と直結していると考えるからでもある。しかし、その一方では、「人の幸・不幸はお金だけでは、決まらない」ことも知っている。大金持ちが全員幸福でないことは、小学生でも理解できる。

選択肢を知り、自分の価値に基づき選ぶ

目の前にある選択肢を自分の生き方に合わせて選ぶことで、人の幸福は実現できる。従って、今時分が生きている社会に存在する(=合法的)選択肢があることを知ること、自分独自の選択基準をもつこと(=自分のもつ価値基準を知ること)が幸福な人生を築くための基礎といえる。そして、これらの基礎をもつ人を阻害する要因がないことが、幸福実現にとって大切である。世の中のことがわかり、自分のやりたいこと、できることもわかった人が、性別や門地等の外的な要因で阻害されたのでは生きる意欲を奪い、しいては社会の発展を妨げることとなる。

多様な人が、多様な選択をし、多様な出会いが生まれる。そこには、人の生きる意欲を支える敬意と感謝の交換があり、「生きている価値を認め合える人間関係」の輪が作られていく(太田, 2005)。人生には、失敗がつきものである。そして、喜怒哀楽もそれに伴い生涯続いていく。平々凡々と人生を送りたくても、そんなことは社会が許してくれない。普通に生きてきたつもりでも、気がつけば、食べるものも住む家もなく、医者にかかるお金もない。そんな時に、地位も名誉も金もなくとも、一緒にいてくれる人があなたにはいますか？性別・年齢・学歴・資格・経験年数・これまでの業績貢献度等による評価は、あなたの全てをあらわすものなのか？人生は多面的である。だからこそ人生いたるところに青山ありなのである。そこで、べっしょんこになった自分を復活させる出会いの場を、犠牲にするような生き方はよくない。

人生は生涯試行錯誤の連続であるなら、認め合える場面も複数ある方が生きる意欲を維持しやすい。日常生活の多様な側面間のバランス感覚が、人生の選択肢を実感させ、個人の価値観や適正を明確にし、幸福感を増大させることとなる。仕事か家庭か、それとも個人の時間か、これらのなにかを犠牲にした人生ではなく、バランスのとれた日常の積み重ねが、多様な価値観を実現させる現代社会のあり方としても有用であろう。

ワーク・ライフ・バランス態度に示される人生の質を高める生き方

ワーク・ライフ・バランスという言葉が人口に膾炙されるようになって久しい。ワーク・ライフ・バランス(=以下 WLB)とは、様々な定義がなされているが「年齢、人種、性別に関わらず、誰もが仕事とそれ以外の責任、欲求とをうまく調和させられるような生活リズムを見つけられるように、就業形態を調整すること」であり、バランスのとれたライフスタイルに関する「態度」についても示している。態度は、認知と感情そして行動の3層構造からなり、幸福の条件である選択肢を知ること、自分が楽しいと感じること実行できることも対応しており妥当な定義といえよう。具体的には以下の3点があげられよう。

「WLB はあらゆる人のためのものである。」

WLB とは、子育て期の女性に限らず、男性も女性も、若いも若きも、子育てを含め介護、地域活動、自己啓発など、様々な活動を希望に沿った形で展開できる状況であり、その態度は幸福実現につながる。

仕事や家事、子育て、介護、家族との団らん等の家庭生活。そして、PTA活動や、町内会等の地域活動。自分たちで立ち上げたNPO活動や、ボランティア活動等の社会貢献活動、市民大学への参加などの自己啓発や生涯学習、趣味の時間の確保、友人・知人との交流、健康づくりや休養が私たちの人生の選択肢としてあることを知ることが大切である。

「人生の段階に応じて、自分が求める生き方の【バランス】を決めることができる。」

仕事、家庭生活、地域生活、個人の自己啓発など様々な活動間のバランスは、その人の年齢や置かれる立場、役割の取得程度によって変えられる。また、個人の事情や希望によってもバランスの形は多様である。このように、個人の判断に基づき、バランスを決めることができる。

「WLB は仕事と生活の双方に充実をもたらすライフスタイルである。」

働き方を見直して仕事の効率が高まることで、時間的な余裕が生まれると共に、仕事の成果も高まる。同時に、仕事以外の生活が充実し、個人の生活全般の充実につながる。このことは、意欲や創造性を高め、さらなる仕事の充実にもつながる。このように、仕事の充実と仕事以外の生活の充実の好循環がもたらされる。

仕事と生活の調和(ワーク・ライフ・バランス)に関する専門調査会 男女共同参画会議(平成 19 年 7 月)の結果から

ワーク・ライフ・バランスを妨げる要因について

(バランスよく生きることは理想でも現実はいくぶん甘くない！)

ワーク・ライフ・バランスについては、政府等行政も各種調査をおこなっており、働き方についての現状把握が進められている。ここでは「仕事と生活の調和(ワーク・ライフ・バランス)に関する専門調査会、男女共同参画会議平成19年7月」の結果を紹介しつつ現状を概観する。

男だって家事や育児に関わりたいのに

既婚男性では、仕事・家庭・個人生活の両立を希望している人の割合が最も高い。特に子どもを持つ父親が育児にかかわることについては、本人及び配偶者も強く希望している。しかし、現実には、子育て期の男性は長時間労働で、帰宅は深夜といった状況にあるなど、仕事中心となる場合が多い。実際、既婚者の男性において、生活のなかで「仕事優先」を希望する人の割合は約2%に過ぎず、「仕事・家事・プライベートを両立」を希望する人が約32%を占めている。しかし現実には、5割以上の人々が「仕事優先」となっており、希望と現実の間に大きな差があるのが現実だ。父親も母親同様育児参加への希望や期待も大きいし、父親に、仕事と同じくらい育児にかかわってほしいという母親の割合も高い。

未だに、やっぱり家事育児は女性の現実

家庭責任については、男女が共に担うものである。しかし、現実には女性が大きな家庭責任を担っている場合が多く、結婚・出産の際に、仕事をそのまま続けたい、あるいは働き方を柔軟に変えたいとの希望があっても、現実には就業環境に柔軟性が乏しく、継続就業や希望する形での再就職が難しい状況となっている。これらの背景として先述の男性の働き方も関連していると思われる。日常の男性が家事・育児・介護等にかかわる時間は、妻の就業状態にか

かわらず 30 分程度となっており、家事・育児の女性の負担は大きい。卒業後、一度は就業しながら現在は職についていない、30 代・40 代の女性の家庭では、配偶者・パートナーが、残業が多く融通性もない働き方をしている割合が高くなっており、配偶者・パートナーの働き方と女性の働き方の選択には関連があることが推察される。30 代・40 代の女性の 3 人に 1 人は、主として結婚を理由に離職している。結婚時の働き方の選択については「仕事をこれまでと同じように続けた」人や「働き方を変えて仕事の負担を減らした」人で満足度が高く、不本意ながらも家庭での役割負担を担いながら自己の実現とは隔たりのある働き方を余儀なくされている女性の現実が示唆されているといえよう。また、出産は女性にとって大きな転機となっており、きょうだい数 1 人(本人のみ)の世帯で出産を機に仕事を辞める女性が 7 割に上っている。育児休業制度の整備は進みつつあり、育児休業を利用する者は増えているものの、第一子出産前後の継続就業率は高まっていない。しかし、子どもが中学生以上になると 9 割以上の女性が働くことを希望し、働き方としては、「フルタイムだが残業のない仕事」を希望する割合が高い。しかし、現状では、働いていない人の割合が、働くことを希望している人の割合より高く、働き方もパート・アルバイトが多くなっている。

パートタイム労働者の給与水準は、一般労働者と比べて低くなっている。なお、独身男女も、現実には仕事中心となっている中で、仕事以外の活動(私的な交流、自己啓発や趣味、休養など)に向けるプライベートな時間を優先したいとの希望は高い。特に、独身男女では、プライベートな時間を優先したいとの希望が最も高い(男性 46%、女性 41%)が、仕事優先の割合が最も高い(男性 52%、女性 37%)のが現実である。

自己啓発や地域活動への参加が困難

自己啓発は、個人が自身の能力や意識を高めて満足感を得ると同時に、自身の価値を高めることができるものであり、自律的な自己啓発の必要性も高まっている。また、働く人々も地域社会の一員としての役割を果たし、身近な地域でソーシャル・サポートを構築していく契機としてその参加は重要であると考えられる。

しかし、これまで見てきたように現状では長時間労働等により、自己啓発や地域活動に参加する時間を確保することが難しくなっている。実際、約 3 割の企業が能力開発は従業員個人の責任と考えており、働く人たちも「仕事が忙しくて、自己啓発の余裕がない」人が多く、自己啓発を実施している人は半数に満たないのが現実である。NPO やボランティア、地域での活動に参加していると回答する人の割合は約 1 割に過ぎず、約半数が「今後は参加したい」という潜在的な参加希望をもちながらも、「活動する時間がないこと」を理由に、実際には参加していないのが現状である。

長時間労働が心身の健康に悪影響

長時間労働は、心身の健康に悪影響を及ぼし、心身の疲労の蓄積は不慮の事故や疾病、過労死等を招きかねない。これは、本人や家族にとって不幸であるのはもちろん、社会的にも大変痛ましく見過ごし難い問題である。これまでの調査からも、自分の仕事や職業生活に関して、「強い不安、悩み、ストレスがある」とする労働者は 6 割以上に上っており、そのうち 3 割以上の人、「仕事の量の問題」をその理由としてあげている。また、月間の超過労働時間が

50 時間を超えると、「いつも」あるいは「しばしば」「一日の仕事で疲れ退社後、何もやる気になれない」とする人の割合が半数を超えている。

こういった意識としての疲労感だけではなく、実際に長時間労働等に起因する脳血管疾患及び虚血性心疾患等（「過労死」等事案）による、労災補償の支給決定件数は、毎年約 300 件に上っている悲惨な現状がある。個人の心身の疲弊は、家族の悲惨を生む。取り返しのつかない事態になる前に、窮地に立たされる人々が専門的援助を求めやすいサポートネットワークの構築は、WLB のうえでも重要な課題といえよう。

就労危機・生活危機・心身の危機が悪循環を生む

しかし、昨今のような世界恐慌の真ただ中にあり、働くところはおるか、今夜とまる所、飢えをしのぐ方法といったライフラインの確保が優先されるような危機状況におかれていると、誰になんと言われようとも、なりふり構わず、「まずは、金」となってしまうがちである。何を犠牲にしても、「今の仕事を失わないために・・・」全ては犠牲にされる危機がそこにある。極度の緊張の連続・疲労の蓄積・事務的な付き合いのみの日常生活で感情は鈍化し、人生の意味すら見失われがちとなる。そして、心身の異常に気がついたときには長期休職や退職を余儀なくされるといった悪循環に巻き込まれてゆく。

悪循環と直面する今こそ、逆に人らしく男女が敬意と感謝に基づく支えあいと思いやりの交換を実現できる多様な生き方を認める WLB の実現により、生活の充実と安定への活路を見出す契機であるともいえよう。

目先の金に齷齪して、大切な人との交流を忘れ、自分を取り戻す時間を全く喪失してしまっていた人間否定の社会から、人が人らしく生きる人権復権の端緒が訪れたといえよう。

人口減少時代を迎えた日本では、労働力の減少が本格化すると共に、内外の競争環境が激しさを増す中で、多様な人材の能力発揮や、一人ひとりの生産性の高い働き方が求められている。少子化、高齢化、家族形態の変化、地域社会のつながりの希薄化などが進展する中で、子育て・介護・地域活動などへの関わりの重要性が増している。男女一人ひとりが意欲と能力を活かして、希望に沿った形で様々な活動に従事することは、社会の安定と活力にとって極めて重要であり、偏向した自己喪失状況に陥らないために WLB の推進は不可欠である。

本調査研究では、対象を四日市市内の高校3年生とした。その主な目的は二つある。一つは、進路選択を目前にした彼らに、WLB の有用性の認識を促進するためである。二つ目は、彼らの就労への準備状況、すなわち WLB 態度の形成過程と、その関連要因を知ることである。なぜなら、この二つの目的は明るく楽しい、そして元気みなぎる社会への再生のための指針となり、研究成果は生徒個人々の就労支援と、今後の教育現場での進路指導と市政に、有用な知見をもたらすことが期待されるからである。

【調査方法】

< 調査対象者 >

四日市市内に所在する高校 3 校の第 3 学年に在籍する生徒(平均年齢 17.68 歳)

私立女子高校 女性 80 名 (就職 2% 進学 98%)

公立工業高校 女性 11 名 男性 308 名 (就職 75% 進学 25%)

公立普通高校 女性 162 名 男性 143 名 (就職 1% 進学 99%)

調査対象者合計 女性 252 名 男性 451 名 各学校の就職・進学率は 08 年度実績以上の対象者に対して 2008 年 9 月～11 月における進路決定の時期に各学校の担当教師により以下の構成による質問紙を配布・回収を行った。

< 質問紙の構成 >

1. ワーク・ライフ・バランスの認知度について尋ねる質問項目
2. 将来の生活における「仕事」「家庭生活」「地域・個人の生活」の優先性について尋ねる質問項目
3. 日常生活における両親の「仕事」「家庭生活」「地域・個人の生活」の優先性について尋ねる質問項目
4. 就職後の「家庭生活」「地域・社会活動」「学習・趣味・スポーツ」「休養」に対する時間配分の可能性について尋ねる質問項目
5. 学校生活への適応度を尋ねる「学校生活スキル尺度(太田,1992)」15 項目
6. 生徒の困窮状況を援助してくれる人の人数を尋ねる「ソーシャル・サポート尺度(久田ら,1989)」15 項目
7. 家庭での家族内対人関係について尋ねる「家族スキル尺度(太田,2005)」から抽出した 13 項目
8. 性役割葛藤の程度を尋ねる 10 項目
(心理測定に用いた尺度の信頼性については、SPSS 統計ソフトによる尺度内的整合性の観点から推定し、その結果 係数が全ての尺度において.805-.957 の間で推移しており適用が妥当であることが証明された。)

< 実施方法 >

公立普通高校と公立工業高校については、授業担当の教師により、総合学習等の授業時間内(20-45 分)に教室に生徒を留め置き配布・回答・回収した。私立女子高校については、担任教師により生徒に配布し、提出期間の 1 週間内の提出を求めた。回収率はいずれの学校も、95%以上であった。

< 分析方法 >

これまでのワーク・ライフ・バランス研究の中から心理的態度和関連する要因を特定するため PsycINFO を用い、アメリカ心理学協会(APA)に登録されている論文からワーク・ライフ・バランスと青年期、内的変数をキーワードとして関連論文 32 論文を抽出し関連変数を特定した。また、国内の行政が実施した調査結果から、「仕事と生活の調和(ワーク・ライフ・バランス)に関する専門調査会、男女共同参画会議平成 19 年 7 月」を引用した。回答結果の分析には、SPSS 統計パッケージを用い、回答結果を数量化し、基礎統計量と各要因の相関分析さらには、グループ間の統計的差異を明らかにするための t 検定を実施した。

第一部

「高校生の WLB に対する態度の現状」

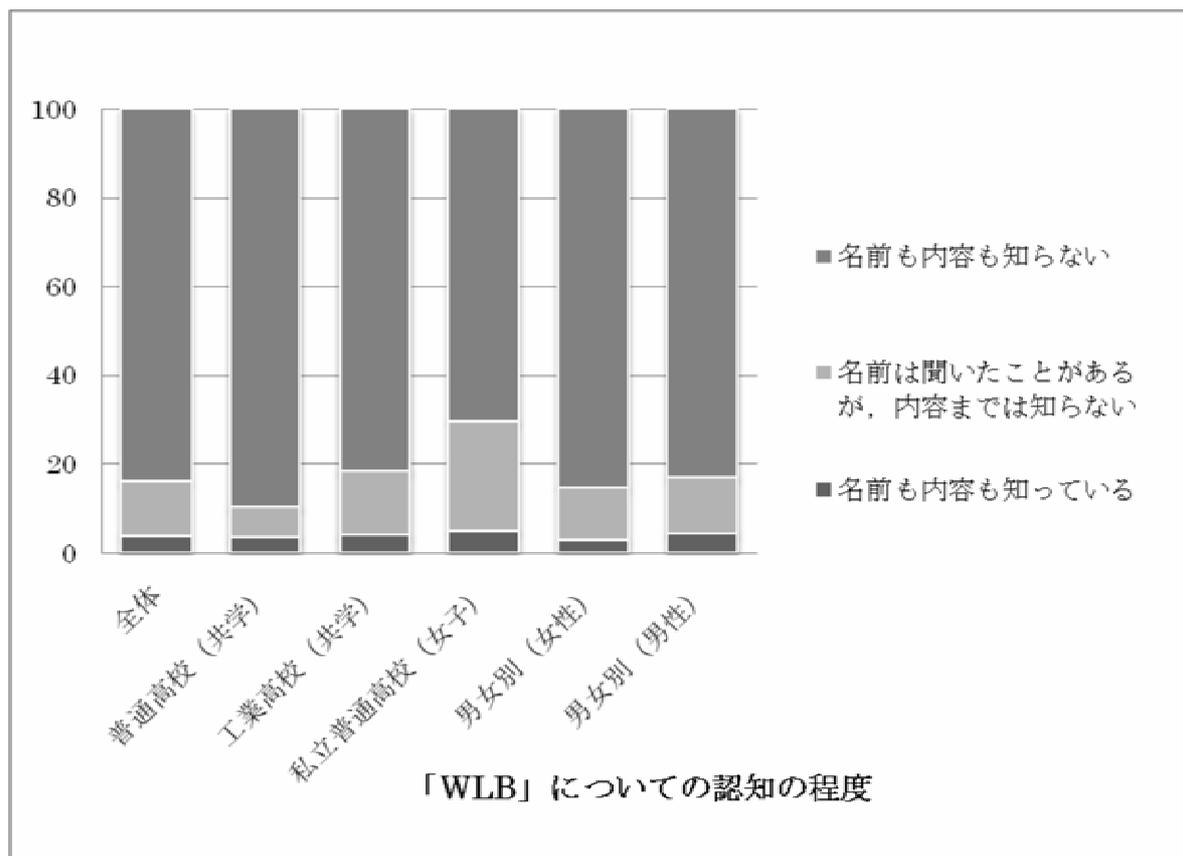
(基礎統計に基づく所属学校と性別による差異)

1) 「WLB」についての認知の程度

あなたは、「仕事と生活の調和」すなわち「ワーク・ライフ・バランス」という言葉をどの程度ご存じですか。

- (ア) 名前も内容も知っている
- (イ) 名前は聞いたことがあるが、内容までは知らない
- (ウ) 名前も内容も知らない

結果



考察

校種別;工業高校・私立女子高校に比較して、公立普通高校の WLB の認知の程度は低く、特に普通高校の女性で、名前も内容も知っていると回答したのは 3 名と少数であった。WLB の多様な有用性について、高校の教育現場での取り組みが求められる。

性別;WLB についての認知に対する性差については、今回の調査では一定の結果は得られなかったが、普通高校では 3 名を除いて全員、工業高校では女性生徒全員が、WLB については名前も内容も知らないと回答しているのに対して、各学校の男性生徒の方が知っているという回答した生徒が多かった。しかしながら、私立女子高校では、3 割の生徒が知っているという回答している。これは、私立女子高校での日常の指導における成果と共に、ジェンダーアイデンティティーが、潜在的に反応の鋭敏さを活性化させていることとも推測され、今後の検討の課題ともいよう。

2) 高校生の「WLB」に対する態度

将来の生活の中での、「仕事」、「家庭生活」、「地域・個人の生活」の優先度についてお伺いします。

まず、あなたの希望に最も近い番号を1つ()にお答えください。

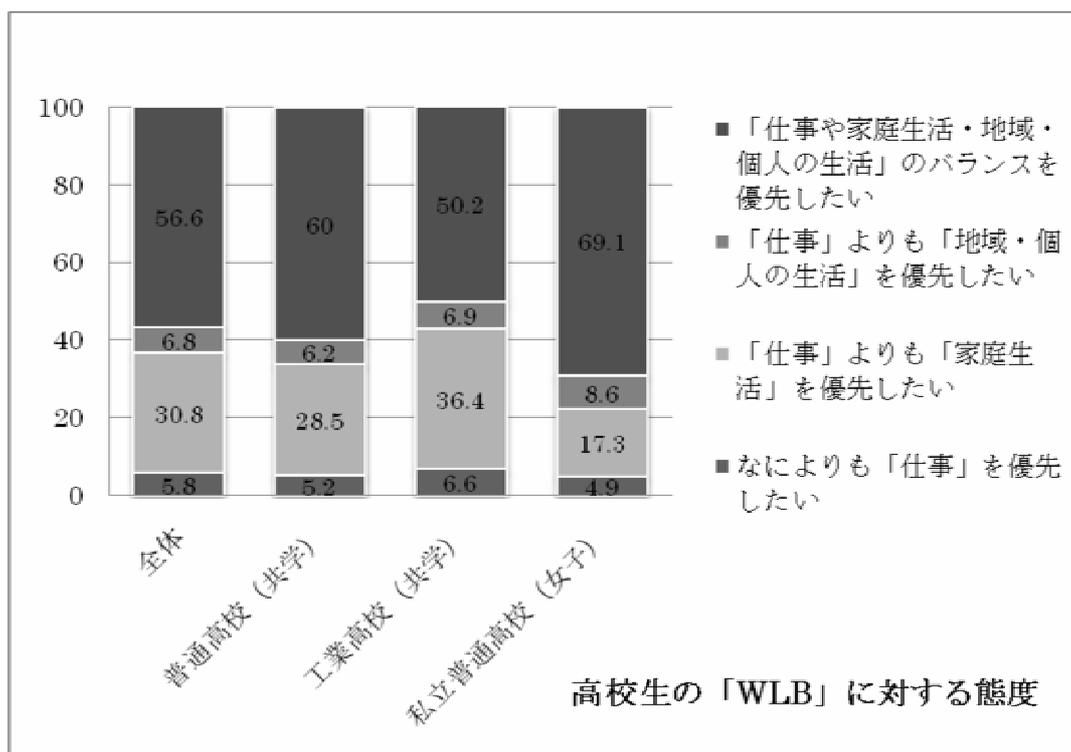
!なによりも「仕事」を優先したい

!「仕事」よりも「家庭生活」を優先したい

!「仕事」よりも「地域・個人の生活」を優先したい

!「仕事や家庭生活・地域・個人の生活」のバランスを優先したい

結果



考察

校種別；低いWLBの認知度とは無関係に、どの学校においても過半数の生徒がバランスを大切にしたいと回答している。しかし、工業高校では、バランスと他の項目との割合は半数となっており、仕事への優先性をうかがわせる回答結果となっている。このことは、他の学校の生徒が進学し、就職への現実感に乏しいのに対して、卒業後の就職(75%の生徒が就職)を現実的にとらえていることが、回答に反映していると考えられる。

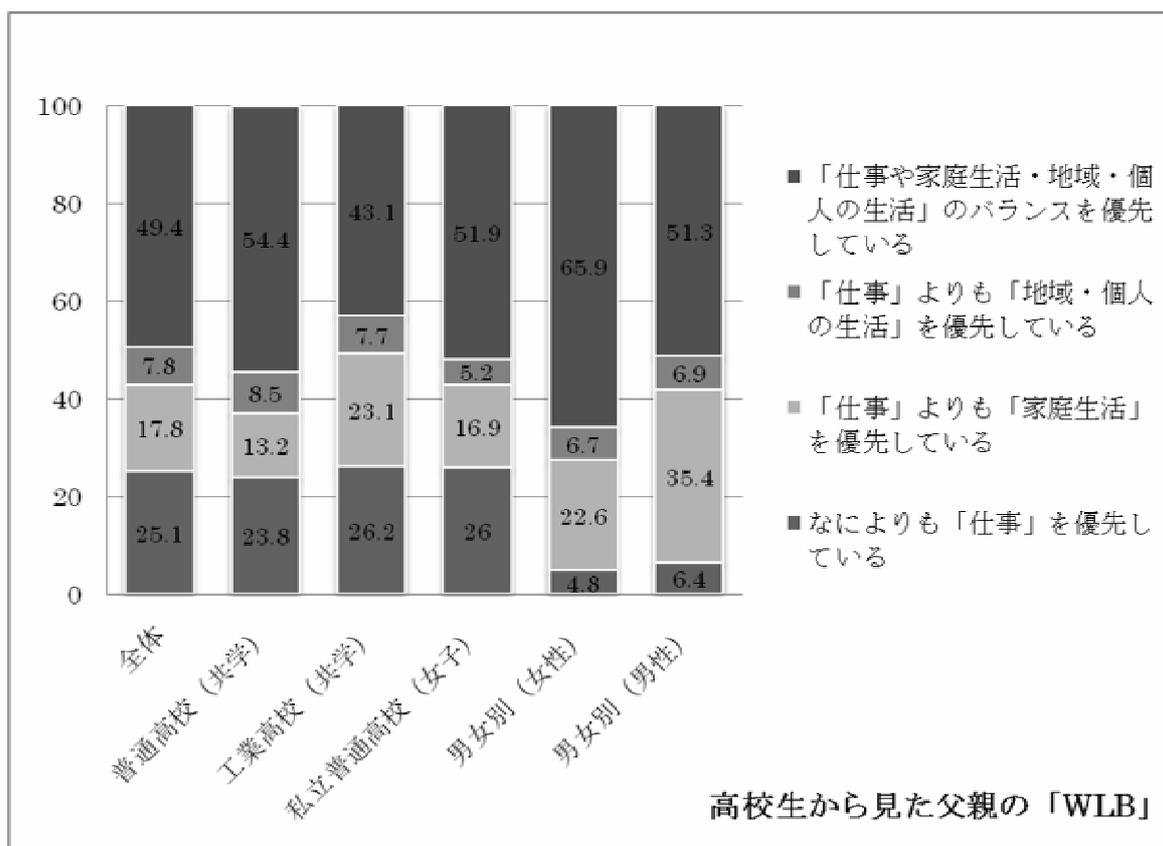
性別；「仕事」を優先したいと回答した生徒は少数であるが、男性の方が女性よりも仕事優先と回答した生徒が多かった。この項目においても、WLBに対する認知の程度を反映して、私立女子高校では、他の学校と比べてバランスを最優先する生徒が多かった。特に、家庭生活を優先すると回答した生徒は、私立女子高校の生徒が最も少なく、女性が家庭役割を担うといった伝統的性役割に対する拘泥が低くなっていることを示唆するものと考えられる。

3) 高校生から見た父親の「WLB」

あなたのお父さんの日常に対するあなたの感想に最も近い番号をこの中から1つお答えください。

- ! 1: なによりも「仕事」を優先している
- ! 2: 「仕事」よりも「家庭生活」を優先している
- ! 3: 「仕事」よりも「地域・個人の生活」を優先している
- ! 4: 「仕事や家庭生活・地域・個人の生活」のバランスを優先している

結果



考察

校種別；約半数の高校生が父親がバランスを優先していると回答しているものの、4分の1の生徒は父親が仕事を優先している回答している。優先性の割合では、共学普通高校と私立女子高校の割合が類似しているのに対して、男子生徒の割合が多い工業高校では、「仕事よりも家庭生活を優先している」と回答した生徒が多く、その結果工業高校の生徒では、父親がバランスを優先していると回答した生徒は半数に満たなかった。この結果は、他の行政や機関がこれまでに実施して結果にもっとも近い結果となっており、現実の就労状況を反映したものととも言えよう。また、今回の調査では、具体的な時間配分等については質問していないため、生徒自身の父親の行動に対する認知に基づく回答となっている。そのため就労を他の高校の生徒よりも現実的にとらえていることが推測される。

性別;女性生徒から見た父親と、男性生徒から見た父親とは、日常生活における優先性の割合で、バランスを優先していると回答している生徒は、女性生徒の方が男性生徒よりも多い。また、仕事よりも家庭生活を優先していると回答している生徒は、男性生徒の方が多く、男性生徒は近い将来の自分のモデルとしての父親への観察を現実的に認知しており、家庭と仕事で、いっぱい、いっぱいの父親の日常を感じている生徒が、半数いることが示唆されているといえよう。

この結果について、同性だからこそ精密に観察した結果なのか、異性の親についての関心の薄さから期待を反映した結果なのかについての判断は今後の調査研究を待たなければならないが、身近な同性の親子の態度の世代間連鎖が、ルートとして介在していることも推測されよう。

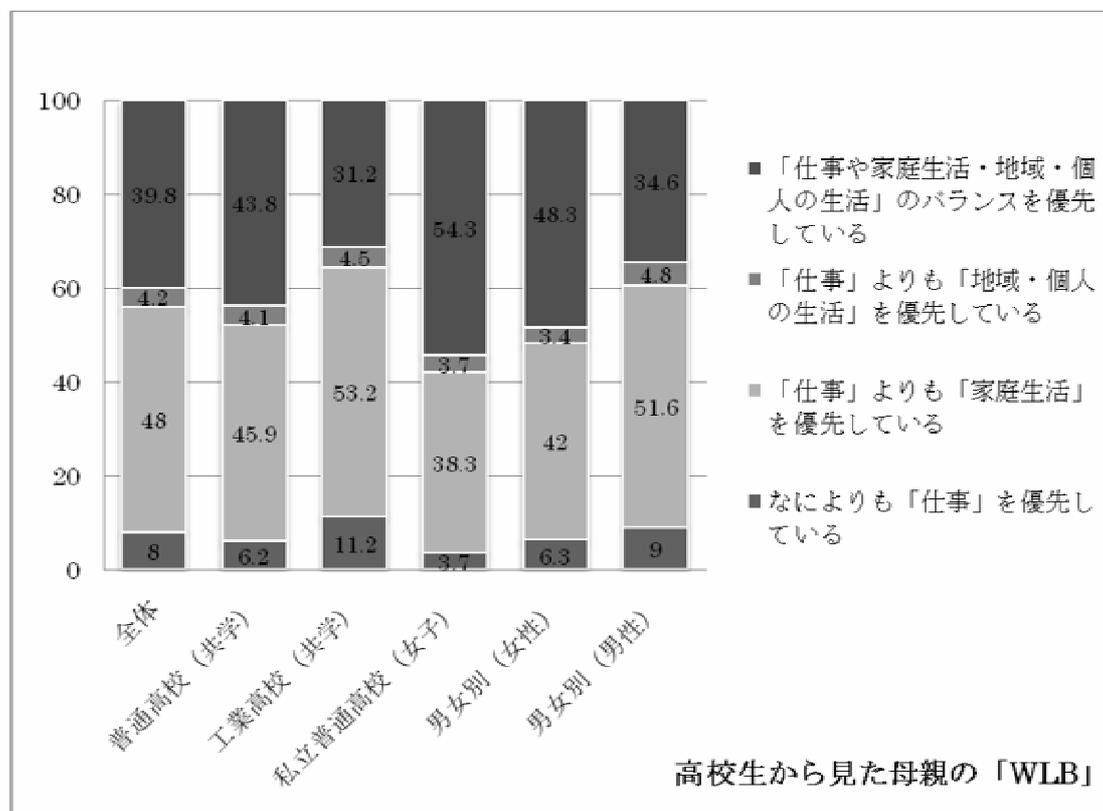
また、母親に比べて父親は、家庭と個人生活への時間のマネジメントはできても、学校・地域行事や会合等の地域活動等への参加は、体験的に少ないように感じられる。

4) 高校生から見た母親の「WLB」

あなたのお母さんの日常に対するあなたの感想に最も近い番号をこの中から1つお答えください。

- ! 1 なによりも「仕事」を優先している
- ! 2 「仕事」よりも「家庭生活」を優先している
- ! 3 「仕事」よりも「地域・個人の生活」を優先している
- ! 4 「仕事や家庭生活・地域・個人の生活」のバランスを優先している

結果



考 察

校種別；父親のWLBに対する評価と異なり、母親はどの学校の種別に関係なく、「仕事」よりも「家庭生活」を優先していると回答した生徒が多かった。本調査では、父母の就労状況について質問していないが、母親が専業主婦、あるいはパート等の非正社員であることも推測され、そういった現状も含めて伝統的性役割による家庭役割の存在を示唆するものといえよう。特に、工業高校の生徒は他の学校の生徒よりも母親が家庭生活を優先している回答した生徒が多く、私立女子高校では他の学校の生徒よりも少なかった。工業高校の生徒は、母親が仕事を優先していると回答している生徒も他の学校の生徒よりも多く、この質問においても現実に即した回答結果となっているといえよう。私立女子高校の生徒は、母親が仕事を優先していると回答した生徒は他の学校よりも少なく、この質問に対してもバランスを優先していると回答した生徒が多数を占めている。ここでも、やはりジェンダーアイデンティティーの潜在的影響過程が推測される。

性 別；性別では、あきらかに女性生徒よりも男性生徒の方が母親が家庭生活を優先していると回答しており、女性生徒はその回答よりも10%も下まわり、逆にバランス優先が10%高く回答されている。この質問項目においても、やはり親のジェンダーへの暗黙裡の期待が介在することが予見できる。すなわち女性生徒については、現状の母親の日常生活については、バランスのとれたものであると認知されているのに対して、男性生徒については、家庭における役割が優先されていると認知されていると考えられる。また、女性生徒のジェンダーからの解放性に対して、男性生徒の固定的な認知が潜在的に残存しているともいえよう。

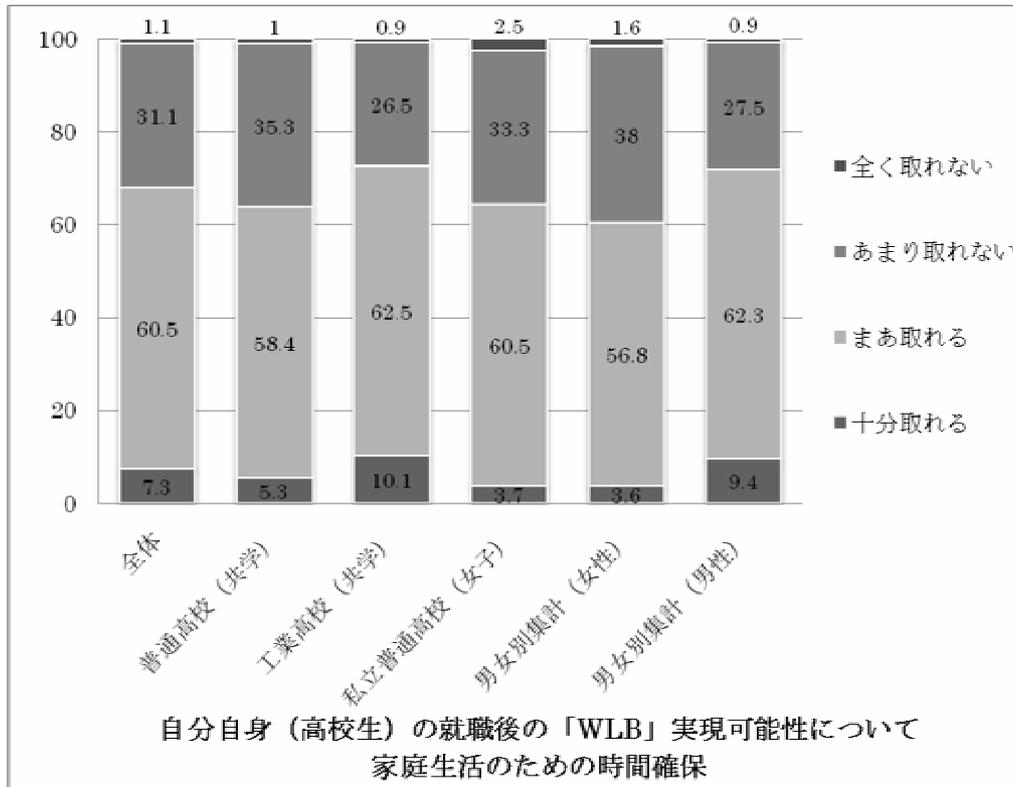
5) 自分自身(高校生)の就職後の「WLB」実現可能性について

5-1 家庭生活のための時間確保

就職したら家庭生活のための時間は十分取れると思いますか。

1 十分取れる 2 まあ取れる 3 あまり取れない 4 全く取れない

結果



考察

校種別; 家庭生活のための時間確保について、6割を超える生徒は所属する学校に関係なく、確保できると回答している。先の父親・母親の優先性の回答割合からは、より現実的な回答となっていることがうかがわれる。また、家庭生活の時間の確保が困難であると回答した生徒が全体で30%を超えていることから、父親・母親の世代とは異なり、自分たちの時代の困難さを予測したものであるとも推察でき、マスメディア、あるいは高校生を取り巻く社会を通して、子育てを含めて家庭生活と仕事との両立の難度の高さを感じていることのあらわれともいえよう。

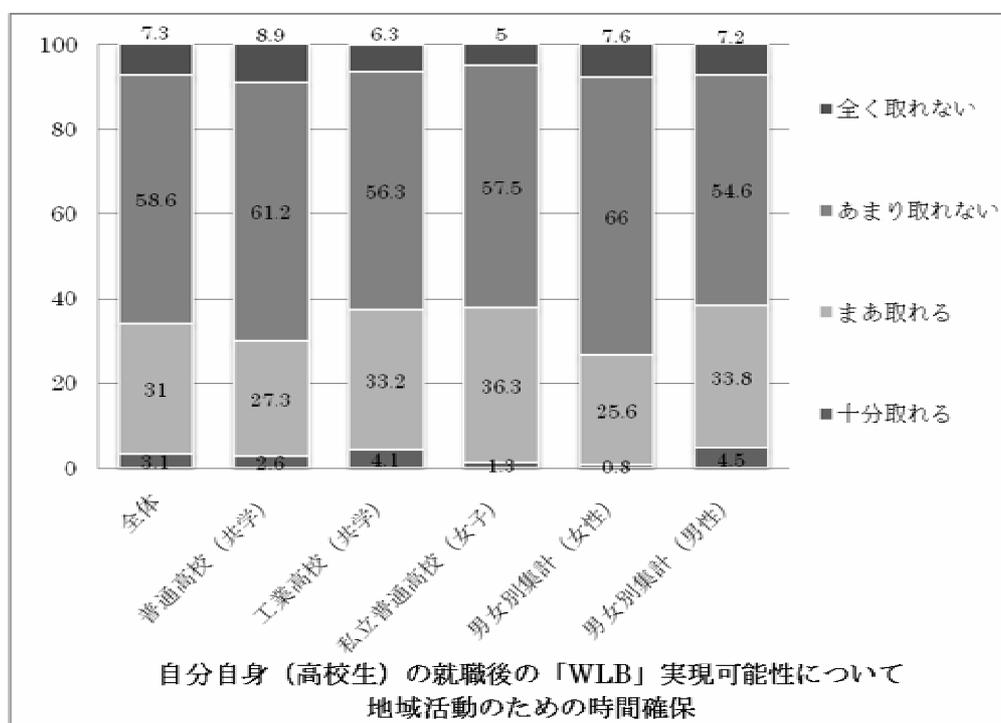
性別; 家庭生活の時間確保の難度を最も高く評価しているのは私立女子高校の生徒であった。先の質問において、自分たちの親については、確保していると認知している回答が多数であったが、約4割の生徒が確保は難しいと回答している。このことは、現実の家庭でもマネージメントを、現在の自分の処理能力において評価した場合に、困難が予測されているとも考えられる。ここでも、家庭での性別における固定的役割の認知が影響していることも推察できよう。

5-2 地域活動のための時間確保

就職したら地域・社会活動に参加する時間は十分取れると思いますか。

1 十分取れる 2 まあ取れる 3 あまり取れない 4 全く取れない

結果



考察

校種別；所属学校に関わり無く、全般的に地域活動のための時間確保の実現可能性が、他の項目の実現可能性よりも低く報告されているのは、他の調査研究の結果同様、個人の生活を最優先する価値観が支配的であることの反映とも解釈できる。特に進学高校である普通高校ではその傾向が顕著にみられ、7割もの生徒が地域活動のための時間の優先性を低く見積もっている。

これは日本社会における地域活動への参加が他の活動に比べて、個人の生活や自己実現に対する重要度や影響度が、低く認知されていることを示していることとも、無関係ではないように思われる。

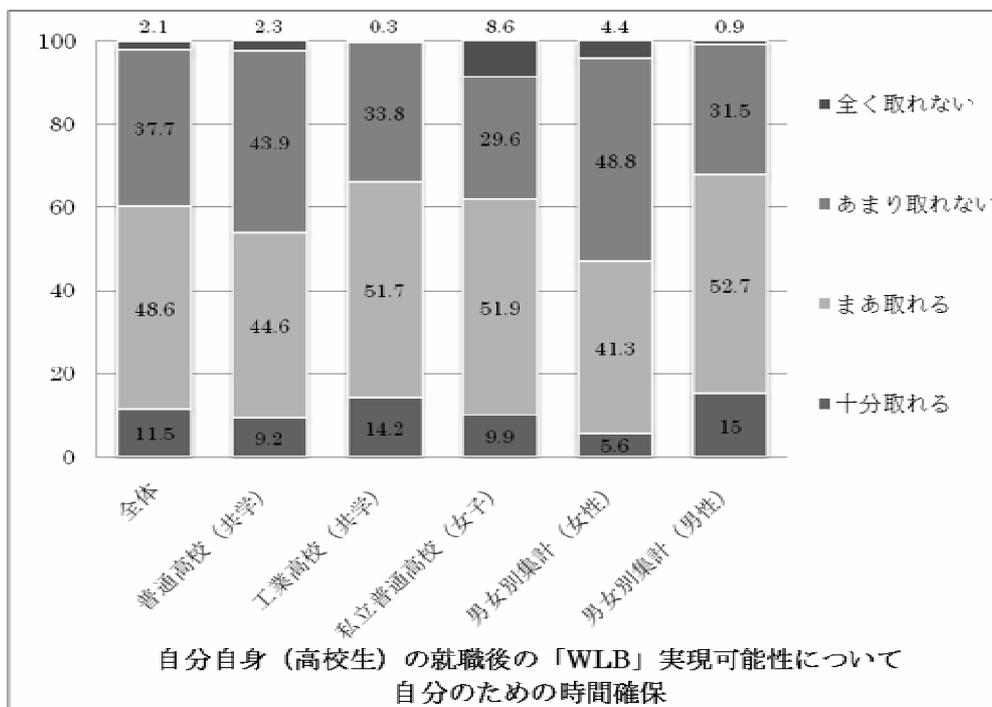
性別；男性よりも女性の方が、地域活動の時間確保は困難であると感じている生徒が多く、仕事や家庭生活等での負担感を大きく予感していることの反映とも理解できよう。特に普通進学高校での女性生徒は、地域活動の時間確保の困難度を高く評価しており、地域活動よりも仕事や家庭生活での自己実現を高く評価している様子が窺われる。地域での連携やソーシャル・サポートの形成は、緊急時の相互扶助や精神的健康に有用であることは、すでに多くの調査・研究結果により明らかである。地域で繋がる事の楽しさや有意義さについて青少年に実感できる機会を多く提供し、向社会的態度の形成に努める必要がある。

5-3 自分のための時間確保

就職したら学習・研究、趣味・娯楽、スポーツなどのための時間は十分取れると思いますか。

- 1 十分取れる 2 まあ取れる 3 あまり取れない 4 全く取れない

結果



考察

校種別；地域活動の時間の確保が困難であると見積もっていた生徒たちであったが、自分のための時間確保については、校種に関わり無く過半数の生徒が確保できると回答している。先ほどの考察とも一致して、私事化傾向の反映ともいえよう。ただ、ここでも普通進学高校の生徒は確保が難しいと回答している生徒が多く、仕事の優先性の影響がうかがえる結果となっている。逆に工業高校の生徒は自分の時間を全くとれないと回答した生徒は1名だけであった。このことは本調査の協力校である工業高校の生徒が他の学校の生徒よりも、部活動において自己実現の経験を多く持つ生徒が多いことの反映とも理解できる。

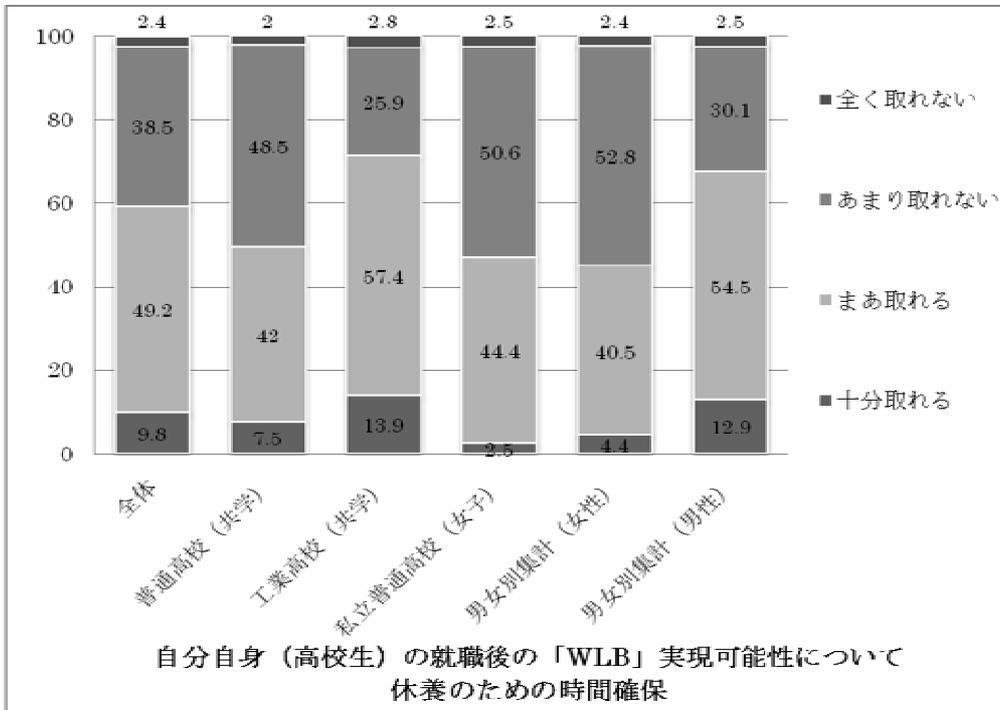
性別；男女別集計において、男性の方が女性よりも、自分のための時間確保の実現可能性を高く報告している。この結果は、伝統的性役割の影響から、女性は就職後に家庭生活や育児等により、自分のための時間確保が難しいと考える傾向がある一方で、男性はそれらの負担感を現実的に捉えていないことも予測できる。WLBの実現には、性別役割の固定的な認知は阻害要因である。男女共修の家庭科等で、性別に関わり無く家庭経営等の学習はしているものの、日常の家庭生活における世代間連鎖のメカニズムの方が、強い影響過程を有していることが示唆されているとも考えられよう。

5-4 休養のための時間確保

就職したら、休養のための時間は十分取れると思いますか。

1 十分取れる 2 まあ取れる 3 あまり取れない 4 全く取れない

結果



考察

校種別; 全体として4割の高校生が、十分な休養のための時間が確保できないと報告しており、親のバランス態度についての認知とは異なる結果である。普通高校と私立女子高校では、工業高校の生徒に比べて、十分な休養をとることができないと認知している生徒が多く、就労に対する厳しさを予測していることが示唆されているといえよう。工業高校の生徒は、就職指導や実際の就労先選択の機会に、労働条件や法的な保護制度等についても周知していることも考えられ、進学する他の学校の生徒よりも現実的な判断に基づき回答しているとも考えられよう。

性別; 男女別集計で、女性は50%以上が十分な休養のための時間が確保できないと報告しているのに対して、男性は30%程度にとどまっている。このことは、休養時間を削ってでも優先しなければならない課題を、女性生徒が認知していることの現れであり、結婚・子育て期の女性の就労を妨げる要因ともいえよう。

高校生の段階で、休むことも許されないと感じている女性が半数を超えている現実を真摯に受け止めることは、女性の就労への意欲を高めるための具体的な施策を考える上で不可欠である。

第二部

WLB に対する態度と学校生活・家庭生活・性役割 との関連性について

第一部の基礎統計結果から

第一部では、異なる属性の学校に所属する高校生のWLBに対する態度について、所属する学校による影響と性差による影響について概観した。その結果は、図と項目毎に示したように、所属学校における差異も若干見受けられたが、その影響よりも性別の差異の方が大きいことが示された。また、質問項目に対する回答傾向では、WLB について直接質問した、項目1)2)の回答では、それぞれの質問項目間での差異は小さく、これまでの調査結果とも隔たりがあり、高校生にとって現実感の薄い聞きかたになっていたことが予測される。これらの項目に対する回答結果よりも、現実感の高い回答が得られていたのは、5-1「家庭生活」5-2「地域活動」5-3「学習・趣味」5-4「休養」の時間配分についての回答であった。これらの結果をふまえて、以下の分析では、高校生のWLB態度について、将来の就労後における日常生活の時間配分可能性に対する回答を分析対象として検討する。

高校生のWLB態度の関連要因

1)「社会的スキル」とWLB態度

「社会的スキル」の説明とWLB態度との関連性

高校生のWLBに対する態度の関連要因として、本調査では、中心的な要因に社会的スキルを特定した。特に、就労時の集団内適応との関連性の予測要因として、「学校生活スキル」尺度15項目と、家庭における家族との対人関係の良好度を知るための指標として、「家族スキル」尺度15項目を特定した。私たちはみな、社会の中で生活しており、家庭にとどまらず、学校や地域、そして職場で他者とコミュニケーションをとったり、多様な職種の人と共に仕事をしたりして暮らしている。私たちの日常生活は、個人だけの独力では完結し得ない、他者との有形無形の交換により成立しているといえよう。

従って、日常の社会的生活を円滑におくり自己を実現するためには、良好な対人関係の形成が重要課題となる。良好な対人関係は、個人が対人関係に関する高い内的特性があると考えられると共に、一方では対人関係を円滑にして自己を実現する技能を、それまでの生活経験を含むトレーニングによって獲得した、または身に付けていると考えることができる。ここでいう対人関係の技能とは社会的スキルとよばれ、個人の持って生まれた対人関係の志向性ではなく、経験やトレーニングによって良好な対人関係を築くことが可能な個人の行動と、その準備状況としての態度の側面を指す。具体的には、対人関係であれば、人にあいさつしたり、話しかけて会話を始め、親しくなったり、仲良くする。人の表情や態度、言葉からその人の感情や気持ちを推察する。自分の感情や気持ちを上手に伝える。気の進まない依頼を上手に断ったり、人との対立を解決する。学校や職場で、自分の役割や立場を理解して、周りの人と協調して、課題や仕事を効率よく進めることも、社会的スキルに含まれる。

WLB態度の形成においても職場・地域・学園・友人・知人・肉親・家族などの中でも、社会的スキルの「自分を表現できる能力」「意見を言ったり発表したり纏めたりする能力」「身振り手振りなどの態度・物腰・表情の能力」で支えあい、自己を実現する豊かな人間関係を築いていく態度は不可欠である。また、近年この社会的スキルの欠如(苦手・下手・不安)から、職場不適應や家族内孤立等により、心の病気を発症する人は少なくないことも、将来の適応を予測する要因として有用であることの根拠といえよう。

学校生活スキル尺度 15 項目 (太田, 2001) = .803 と WLB 態度との関連性

結果 (= 平均値は、1点～4点までの評定尺度法によって得られた得点の数値を示す。

1～1.9は否定を示し、2～4.0は肯定を示す。)

学校生活への適応行動(女性・高得点順)

質問項目	平均値	偏差
8. 必要だと感じれば敬語で話す。	3.72	0.49
1. 感謝の気持ちを言葉に出して言う。	3.62	0.57
2. 係の仕事や掃除当番の責任を果たす。	3.52	0.62
12. 失敗をした時にすぐ謝る。	3.50	0.62
5. 時と場所に応じた服装をする。	3.45	0.60
9. 必要な時は、友達や先生に助けを求める。	3.26	0.74
11. 学校行事に積極的に参加する。	3.25	0.75
15. 自分たちの仲間以外の人とも話をする。	3.19	0.77
13. 目標実現のために努力を続ける。	3.10	0.69
6. 提出物の期限を守る。	3.09	0.71
10. 自分の机・ロッカー等を整理・整頓する。	3.07	0.83
4. やらなければならないことの手順を手際よく決める。	2.98	0.65
14. 納得がいかない時は自分の意見を言う。	2.85	0.78
3. 異性の友達と楽しく冗談を言い合う。	2.83	1.03
7. 初対面でも自分から話し始める。	2.78	0.87

文頭の番号は質問番号 n=351 min=1 max=4

学校生活への適応度(男性・高得点順)

質問項目	平均値	偏差
8. 必要だと感じれば敬語で話す。	3.73	1.99
1. 感謝の気持ちを言葉に出して言う。	3.39	0.68
5. 時と場所に応じた服装をする。	3.39	0.66
12. 失敗をした時にすぐ謝る。	3.33	0.66
2. 係の仕事や掃除当番の責任を果たす。	3.31	0.69
6. 提出物の期限を守る。	3.20	0.82
9. 必要な時は、友達や先生に助けを求める。	3.08	0.77
13. 目標実現のために努力を続ける。	3.05	0.68
10. 自分の机・ロッカー等を整理・整頓する。	2.93	0.86
15. 自分たちの仲間以外の人とも話をする。	2.91	0.73
4. やらなければならないことの手順を手際よく決める。	2.90	0.68
3. 異性の友達と楽しく冗談を言い合う。	2.83	1.00
14. 納得がいかない時は自分の意見を言う。	2.83	0.70
11. 学校行事に積極的に参加する。	2.76	0.82
7. 初対面でも自分から話し始める。	2.65	0.80

文頭の番号は質問番号 n=423 min=1 max=4

考察

社会的スキルの評定平均を算出した結果、男性生徒よりも女性生徒の方が高得点であった。しかし、女性・男性生徒共に、4点中 3.7～2.7 で推移していることから、今回の調査協力者の学校生活への適応度は高いという結果が得られた。

具体的な行動では、男女共に「8.必要だと感じれば敬語で話す。」が最も多くの生徒が実行している適応行動であり、次いで「1.感謝の気持ちを言葉に出して言う。」「2.係の仕事や掃除当番の責任を果たす。」「12.失敗をした時にすぐ謝る。」「5.時と場所に合った服装をする。」といった行動が、よく実行している行動であることが、回答結果として得られた。比較的に行頻度が少ない行動として、男女共に「7.初対面でも自分から話し始める。」という行動が示されたこと、また、「11.学校行事に積極的に参加する。」行動については、男性生徒よりも女性生徒の方に積極性が予見されたことから、日常の対人行動における円滑さを維持・発展させるスキルについては獲得しているものの、初対面での関係性構築には若干の不安があり、特に男性生徒は行事への積極参加に関して、女性生徒に比べて消極的であることから、新任就労時の人間関係のストレスや、地域行事への参加への消極的態度が予見される。

学校スキルの平均値の合計得点と、「家庭」「地域参加」「余暇」「休養」の各時間確保との予見性得点との相関を算出した結果、女性では全ての項目と相関が見られたのに対して、男性では家庭時間とのみ相関がみられた。このことは、学校生活における社会的スキル尺度の質問項目に示された行動の実行がWLB態度の形成に有用であることを示しているものといえよう。

2) 青年期の家族関係と適応

家族機能の認知とWLB態度との関連性

人口流動率が高く、一定の場所で親子代々暮らしているといった家族が減少している。また、一定期間の定住が可能な家庭でも、夫婦共働きで早朝から夜遅くまでの仕事、子どもたちは塾などすれ違いが多く、家族内の相互の交流は難しくなっているのが現状といえよう。教育現場でも、高校生の相談の中から自分を理解してくれない(本当の自分の考えや希望を親と話し合う機会がもてなかった)・相談に乗ってくれない(今の自分のことを心配してくれない)・親の期待を押し付けてくる(期待に応えなければ切り捨てられる)といった言葉が頻繁に聞かれる。

高校生にもなり、直前に自立を控えた若者のこういった依存的な要求や、甘えともとられる発言を親に訴えることは難しい。しかし、学生期間の長期化やフリーター化などで、平均的に自立の時期が遅滞する現代社会では、目だった問題行動がないとしても、20～30代の人たちの親への依存傾向はむしろ強まっている。子どもが自立し安定した精神的自立を達成するためには、家族内部の情緒関係(親子関係)から外部社会の情緒関係(男女・友人関係)への移行が必要であり、その為には家族外部に信頼できる異性か、親友との人間関係が形成されることが望ましい。長期間にわたって心理的に甘えたり、親密にコミュニケーションできる相手が全くいない状態が続くと、自分の存在意義・働くことの意味やプライベートにおける自己の位置づけを見失いやすくなるので、外部社会の情緒関係(男女・友人関係)が欠如している時に

は、家族(両親)や周囲の知人の心理的支援が必要になることも少なくない。

家族の機能は、個人に対する機能と社会に対する機能に分けられ、一つは「対個人機能」で、個人の持つ様々な欲求を充足させ、労働力の再生産、種の再生産を可能にする作用である。後一つは「対社会機能」で、再生産された労働力によって、社会の存続維持、成長発展を可能にする作用である。この機能は、家族内の円滑な対人行動が家族外の対人関係の構築を促し、社会への適応機能を有することを意味する。家族機能が不全である場合は、「子育て」、「団らん」、「地域との関わり」といった本来家庭に存在すべき機能が、健全に機能していない家庭内の対人行動の問題を生起させる。

機能不全家族の中で育った子どもは、機能不全な環境や考え方をする。自分の家族の考え方、行動スタイル、ライフスタイル、将来的展望が一般的であると認識して成長しやすく、また幼少期の重要な人格形成において愛情を得る機会が非常に乏しく、自己愛・自尊心、他者への共感、他者の苦しみに対する理解等に欠けた人間にもなりやすい。これは、他者と共存し、自分の生活、支え合う喜びを分かち合う WLB 態度とは相対する、反社会的態度の形成を促す要因ともいえる。この結果、機能不全家族では、社会と健全な関係を築くことができない大人が輩出される。

本調査では、「家族スキル尺度」への高校生の回答を求めることで、家族機能の健全さと高校生の家族への適応度を知る指標とし、WLB 態度との関連性を検討した。

結 果

家族関係(女性・高得点順)

質問項目	平均値	偏差
1. 家族で楽しく冗談を言い合う。	3.27	0.81
13. 病気やけがなど急なときに、助け合う。	3.26	0.71
4. 家族に対して冷静にきちんと自分の言いたいことを話す。	3.15	2.74
9. 家族みんなが思ったことを自由に話し合う。	3.06	0.88
3. 自分の進路について親・きょうだいと話し合う。	3.04	0.83
2. 感謝の気持ちを言葉に出して言う。	3.00	0.81
12. 家族はお互いがどこで何をしているかだいたい知っている。	2.86	0.89
10. 失敗をしたらすぐに謝る。	2.84	0.84
6. 家族の意見を尊重する。	2.77	0.77
5. 家族の誕生日にカードやプレゼントを贈る。	2.76	1.03
8. その場にはいない家族の弁護をする。	2.64	0.83
7. 元気のない家族をそっと励ます。	2.63	0.81
11. 手があいていれば家事を手伝う。	2.59	0.86

文頭の番号は質問番号

n=244 min=1 max=4

家族関係(男性・高得点順)

質問項目	平均値	偏差
13. 病気やけがなど急なときに、助け合う。	2.97	0.80
3. 自分の進路について親・きょうだいと話し合う。	2.93	0.85
1. 家族で楽しく冗談を言い合う。	2.86	0.91
4. 家族に対して冷静にきちんと自分の言いたいことを話す。	2.83	0.80
2. 感謝の気持ちを言葉に出して言う。	2.82	0.873
9. 家族みんなが思ったことを自由に話し合う。	2.81	0.88
10. 失敗をしたらすぐに謝る。	2.78	0.80
12. 家族はお互いがどこで何をしているかだいたい知っている。	2.68	0.81
6. 家族の意見を尊重する。	2.62	0.79
11. 手があいていれば家事を手伝う。	2.41	0.83
8. その場にいない家族の弁護をする。	2.39	0.81
7. 元気のない家族をそっと励ます。	2.26	0.81
5. 家族の誕生日にカードやプレゼントを贈る。	2.10	0.94

文頭の番号は質問番号

n=427 min=1 max=4

考察

本調査においても、これまでの研究調査同様、家族関係スキルの高い生徒ほど学校生活スキルも高いという、家族内適応が社会適応を予測する結果が得られ、学校生活スキル尺度と家族スキル尺度の妥当性が証明されたといえよう。上記の結果は、家族スキル尺度得点の性別得点の平均(高得点順)である。性別に関わらず2点以上の平均が算出されたことは、生徒の家族関係が良好であることを示しているものといえよう。ただ全般的に男性生徒よりも女性生徒の方が高得点であった。また、女性生徒では、「1.家族で楽しく冗談を言い合う。」「13.病気やけがなど急なときに、助け合う。」「4.家族に対して冷静にきちんと自分の言いたいことを話す。」といった情緒的交流について頻度が高かったのに対して、男性生徒では、「13. 病気やけがなど急なときに、助け合う。」「3.自分の進路について親・きょうだいと話し合う。」といった行動的交流について頻度が高かった。

この家族スキルの実行の程度は、WLB における家庭生活の時間の確保と、統計的に有意な相関が認められた。このことから、家族スキル尺度により測定される、日常の家庭における対人関係の良好さは、将来の家庭時間の有用性を予測していることを示唆しているといえよう。

3) 支えあえる仲間の実感とWLBとの関連性

ソーシャル・サポートの説明とWLB態度との関連性

ソーシャル・サポートとは、個人を取り巻く、家族、友人、地域社会、専門家、同僚などから受ける様々な形の援助を指す。ソーシャル・サポートは具体的には、大きく分類して、共感や心のケアなどによる「情緒的サポート」と、金銭や物質的な直接的な援助などによる「道具的サポート」の二つに分類される。ソーシャル・サポートの概念は、対人関係と心身の健康をつなぐ接点として、近年多くの研究が報告されてきている。ソーシャル・サポート研究では、抑うつや孤独感、あるいはストレス反応などを従属変数とし、サポートがそれらの心理的苦痛ないし不適応症状におちいるのを防ぐ保護的な効果をもつことを報告している場合が多い。

ソーシャル・サポートの有用性は、援助の観点からばかりではなく、QOL(生活の質)の観点からも進められている。主に行政や有料の社会的な制度・資源だけでなく、人間関係、近隣関係などの個人的な資源を有効活用することにより、QOLが高められるためには、ソーシャル・サポートが必要である。この観点からすればWLBは、QOLに含まれる概念ともとらえることができる。また、安心して自分を委ねることのできる人の存在や、自分を評価してくれる人の存在は、孤独感を低減させ自分の人生に意義を与えてくれる。本調査においても、高校生のソーシャル・サポートと、友人関係や家族関係との関連性を知ることは、有為なWLB態度の形成に不可欠であるといえよう。

結果

自分を支えてくれる人(女性・高得点順)

質問項目	平均値	偏差
6. 会って、楽しく時をすごせる人。	3.31	0.58
15. 気軽に電話やメールで連絡を取り合える人。	3.17	0.64
10. 病気やけがで休んでいる時、勉強など必要な情報を教えてくれる人。	2.89	0.60
9. 気分が沈んでいる時、あなたの気持ちを楽にしてくれる人。	2.88	0.61
5. 心を乱されるような思いをした時、あなたを励ましてくれる人。	2.88	0.64
7. あなたのすることに関心を持っていてくれて、やったことをほめてくれたりする人。	2.86	0.58
2. 緊張しているときや心に重荷をかかえている時、あなたの気持ちをリラックスさせてくれる人。	2.82	0.62
13. あなたに何が起ころうとも、あなたのことを心配してくれる人。	2.82	0.62
1. あなたの能力や特技を認めて評価してくれる人。	2.80	0.59
3. 困ったことや心配ごとがある時、どうすればよいか親身に助言してくれる人。	2.77	0.65
14. 勉強や進路や自分にとって役立つ情報を教えてくれる人。	2.75	0.61
12. ストレスを感じた時、心配事から気をそらしてくれる人。	2.71	0.63
11. さびしい時などに電話をしたり、気軽に訪ねて行っておしゃべりができるような人。	2.67	0.73
8. 将来のことなど、どうしたらよいか信頼して相談に行ける人。	2.66	0.65
4. 手持ちのお金が無くなった時など、気がねなく借りられる人。	2.60	0.72

文頭の番号は質問番号

n=244 min=1 max=4

自分を支えてくれる人(男性・高得点順)

質問項目	平均値	偏差
6. 会って、楽しく時をすごせる人。	3.25	0.66
15. 気軽に電話やメールで連絡を取り合える人。	3.10	0.68
14. 勉強や進路や自分にとって役立つ情報を教えてくれる人。	2.74	0.64
10. 病気やけがで休んでいる時、勉強など必要な情報を教えてくれる人。	2.69	0.69
9. 気分が沈んでいる時、あなたの気持ちを楽にしてくれる人。	2.67	0.68
7. あなたのすることに関心を持っていてくれて、やったことをほめてくれたりする人。	2.67	0.66
5. 心を乱されるような思いをした時、あなたを励ましてくれる人。	2.66	0.67
3. 困ったことや心配ごとがある時、どうすればよいか親身に助言してくれる人。	2.65	0.69
1. あなたの能力や特技を認めて評価してくれる人。	2.64	0.61
8. 将来のことなど、どうしたらよいか信頼して相談に行ける人。	2.64	0.66
11. さびしい時などに電話をしたり、気軽に訪ねて行っておしゃべりができるような人。	2.62	0.77
4. 手持ちのお金が無くなった時など、気がねなく借りられる人。	2.61	0.82
13. あなたに何が起ころうとも、あなたのことを心配してくれる人。	2.61	0.65
12. ストレスを感じた時、心配事から気をそらしてくれる人。	2.60	0.71
2. 緊張しているときや心に重荷をかかえている時、あなたの気持ちをリラックスさせてくれる人。	2.59	0.64

文頭の番号は質問番号

n=427 min=1 max=4

考察

男女とも15項目全ての平均得点は、2.6以上の得点となり、自分を価値ある存在として実感できる人間関係を有していることが示されたといえよう。特に、性別に関わらず「6. 会って、楽しく時をすごせる人。」「15. 気軽に電話やメールで連絡を取り合える人。」は共に3.1を越えて高得点であった。これらのことから、実際に会って交流する体面的関係だけでなく、電話やメール等の電子機器を媒介としたコミュニケーションを併用して、ネットワークが形成・維持されていることがうかがえる。その反面、相対的な観点からすれば、「12. ストレスを感じた時、心配事から気をそらしてくれる人。」「11. さびしい時などに電話をしたり、気軽に訪ねて行っておしゃべりができるような人。」といった、心の内奥の悩み等についてサポートしてくれる人をノミネートする生徒は少なく、得点順では下位に位置している。多様なコミュニケーションチャンネルを利用して、明るく楽しそうに展開していても、なかなか心の苦しみまで共有することは難しい、青年期特有の傾向とも考えられよう。

WLBの各要因との関連性について見てみると、女性生徒は「家庭での時間」「地域交流の時間」「個人の趣味や学習の時間」「休養の時間」のすべてにソーシャル・サポートとの有意な関連性が認められた。一方、男性生徒では、「家庭時間」と「休養時間」との間に有意な関連性が認められた。しかしながら、要因間の関連性から、男女ともソーシャル・サポート「家庭時間」「地域交流」「個人の趣味や学習の時間」「休養」といった関連性がみられること、さ

らにはソーシャル・サポートの形成要因としての学校スキルが、家族スキルの影響を受けることから総合して考えると、日常の家庭における家族間での交流の積み重ねが、「地域交流」や「趣味や学習」「休養」といった WLB 態度の形成要因を統制する要因として機能していることが示唆されているといえよう。このことは、家族集団の機能における凝集性・柔軟性に加えて、開放性の機能を想定することの有用性も示唆するものであり、具体的には、各家庭における家族内の援助授受や役割交換にとどまらず、地域や社会との交流を実行する機会を重視することの必要性を示すものとも言えよう。

4) 高校生の性役割観

伝統的性役割(ジェンダー)の説明と WLB との関連性

高度経済成長期を迎え、先進国の仲間入りをした我が国では、男性と女性の役割の多様化が見られるようになった。しかし、経済的な発展を受けて、法律上の男女平等を制定した先進国の中でも、依然として伝統的な性による役割基準は存続しており、それと結びついた性のステレオタイプが存在していることは、改めて本稿で指摘するまでもなく、多くの研究者によって明らかになっている。

個人の主義主張に関わらず「社会」から押しつけられることの多い、「男らしさ」「女らしさ」に代表される、これらの伝統的な性役割基準は、性差別を引き起こし、豊かな人生を限定し WLB を阻害する要因として考えられる。しかし、現実には日常においても、明らかに伝統的な性役割基準による発言や行動であると思うことでも、性差別を受けていると実感している人々は少ないようである。

今回調査対象となった高校生は、実際には、異性と家庭を営むに至っていない。しかし、異性に関する情報を先入観や偏見に基づくことなく収集し理解することは、特に結婚後の WLB の実現には、不可欠な態度である。本調査では、事前に生徒から性別特性として収集した、自由回答の記述に基づき作成した質問項目から、性別の「能力」「性格」「外観」「身体・生理」「行動様式」といった各領域について尋ねる 10 項目の性差観尺度を作成し回答を求めた。

結果

性差観(女性・高得点順)

質問項目	平均値	偏差
2. 男子は女子よりもたくましい方がよい。	2.92	0.81
7. 職業には性別による、向きや不向きがある。	2.48	0.89
10. 男子と女子では本質的に適正が違う。	2.46	0.83
9. 男女交際では男子がリードすべきだ。	2.39	0.91
3. 女子は男子より手先が器用だ。	2.21	0.78
5. 女子は乱暴な言葉使いをしてはいけない。	1.98	0.85
1. 数理的な能力は個人差よりも性差が大きい。	1.96	0.75
8. 料理や裁縫が嫌いな女性では困る。	1.93	0.82
6. 育児能力は女性特有のものだ。	1.78	0.76
4. 男子がおしゃれするのはおかしい。	1.34	0.57
文頭の番号は質問番号	n=244 min=1 max=4	

性差観(男性・高得点順)

質問項目	平均値	偏差
2. 男子は女子よりもたくましい方がよい。	2.71	0.88
7. 職業には性別による、向きや不向きがある。	2.70	0.91
10. 男子と女子では本質的に適正が違う。	2.43	0.86
8. 料理や裁縫が嫌いな女性では困る。	2.35	0.91
9. 男女交際では男子がリードすべきだ。	2.32	0.87
3. 女子は男子より手先が器用だ。	2.29	0.86
5. 女子は乱暴な言葉使いをしてはいけない。	2.23	0.85
6. 育児能力は女性特有のものだ。	2.08	0.81
1. 数理的な能力は個人差よりも性差が大きい。	2.06	0.83
4. 男子がおしゃれするのはおかしい。	1.62	0.78
文頭の番号は質問番号	n=427 min=1 max=4	

考察

性差観の回答得点では、性別に関係なく、「2. 男子は女子よりもたくましい方がよい。」「7. 職業には性別による、向きや不向きがある。」「10. 男子と女子では本質的に適正が違う。」といった項目で得点が高く、一方で、「4. 男子がおしゃれするのはおかしい。」は性別に関係なく低得点であった。

性別に回答得点が対照的だった項目として、「5. 女子は乱暴な言葉使いをしてはいけない。」「1. 数理的な能力は個人差よりも性差が大きい。」「8. 料理や裁縫が嫌いな女性では困る。」「6. 育児能力は女性特有のものだ。」があげられる。どの項目についても、女性生徒は否定的な回答を示す 2.0 以下であるのに対して男性生徒は肯定的な回答を示す 1.9 以下であった。

以上のことから「外観」については、性差観を共有しているが、「能力」「性格」「身体・生理」「行動様式」については、女性は性差について否定的な態度を有しているものの、男性生徒は性差を肯定する態度を有していることが明らかとなった。

平均値をもとに性差観と、他の要因との関連性を検討した結果、女性生徒は、WLB 態度の形成要因の基礎である、家族スキルや学校スキルと負の相関を示し、男性生徒では正の相関を示した。これは、女性生徒は性差に対して否定的な態度が、家族内での対人関係や学校生活への適応に有用であることを示し、反対に男性生徒では、性差に肯定的な態度が、家族内や学校での適応に有用であることを示していることを意味する。以上のことから、WLB の実現の基礎である、男女共同参画社会の実現には、家庭や学校の教育現場において、特に男性生徒に対して効果的なジェンダー教育が求められる。

5)心の問題に悩んだときにたすけを求める態度

WLB に限らず、卒業後の自立生活にとって不可欠な行動に、窮地に立ったとき助けをもとめるタイミングを間違わないということがある。特に、友人や家族に相談しても、なお、なかなか軽快しない心の問題について専門家に援助を求めることは、WLB 態度の見直しにもつながる重要な行動である。本調査では、Fischer & Turner(1970)の ATSPPHS 短縮版を参考に、筆者らにより日本用に修正した項目を用いて、高校生の援助要請態度について調査を実施した。

結果

心の問題に対する援助要請態度(女性・高得点順)

質問項目	平均値	偏差
1. もし、私が精神的にどうしようもなく落ち込んだときは、家族や友人に話しを聞いてもらおう。	2.85	0.88
4. 不安や恐怖を感じているのに、だれにも助けを求めようとしなないことは、よくないことだと思う。	2.67	0.84
7. 感情的な問題を抱えている人は一人では解決することができるとは思えない。	2.41	0.92
9. 自分の問題は自分で解決するべきである。といった考え方は窮屈すぎる。	2.33	0.87
10. 感情的な悩みは、自然と解決するものである、といった考え方は楽観的すぎる。	2.33	0.84
8. 心の問題でも、精神科への通院やカウンセリング等にお金や時間をかける価値がある。	2.22	0.87
3. 深刻な心の病気かもしれないと感じても、精神科の治療を受ければ治ると思う	1.92	0.81
5. 私は周囲の人に相談しても長期間悩みや、落ち込みから解放されないときには、精神科の手当てを受けたいと思うだろう。	1.88	0.91
6. 将来心理カウンセリングを受けたくなるかもしれない	1.72	0.83
2. だれに相談しても落ち込みから立ち直れないときは専門医の診察を受ける。	1.55	0.77
文頭の番号は質問番号	n=244 min=1 max=4	

心の問題に対する援助要請態度(男性・高得点順)

質問項目	平均値	偏差
4. 不安や恐怖を感じているのに、だれにも助けを求めようとしないことは、よくないことだと思う。	2.61	0.86
1. もし、私が精神的にどうしようもなく落ち込んだときは、家族や友人に話を聞いてもらう。	2.60	0.83
10. 感情的な悩みは、自然と解決するものである、といった考え方は楽観的すぎる。	2.33	0.84
7. 感情的な問題を抱えている人は一人では解決することができるとは思えない。	2.32	0.89
9. 自分の問題は自分で解決するべきである。といった考え方は窮屈すぎる。	2.31	0.88
8. 心の問題でも、精神科への通院やカウンセリング等にお金や時間をかける価値がある。	2.18	0.87
3. 深刻な心の病気がかもしれないと感じても、精神科の治療を受ければ治ると思う	2.10	0.89
5. 私は周囲の人に相談しても長期間悩みや、落ち込みから解放されないときには、精神科の手当てを受けたいと思うだろう。	2.05	0.92
6. 将来心理カウンセリングを受けたくなるかもしれない	1.87	0.89
2. だれに相談しても落ち込みから立ち直れないときは専門医の診察を受ける。	1.66	0.83

文頭の番号は質問番号

n=427 min=1 max=4

考 察

人にたすけを求めることはたやすいことではない。今回の調査においても結果は、男女の別なく「2. だれに相談しても落ち込みから立ち直れないときは専門医の診察を受ける。」という質問項目の得点平均は、女性生徒で 1.55 男性生徒で 1.66 と専門的な他者への援助要請に対しては否定的態度であることを示す結果であった。

しかしながら、援助要請全般に対して否定的な態度であるのではなく、性別に関係なく「1. もし、私が精神的にどうしようもなく落ち込んだときは、家族や友人に話を聞いてもらう。」「4. 不安や恐怖を感じているのに、だれにも助けを求めようとしないことは、よくないことだと思う。」「7. 感情的な問題を抱えている人は一人では解決することができるとは思えない。」といった項目で高得点であることが示すように、WLB 態度の基礎となる家庭や学校での対人関係が、円滑で適応的であると回答している生徒は、他者への援助要請についても肯定的な態度を有していることが明らかになった。

【総合的考察】

ワーク・ライフ・バランス(=WLB)に関するこれまでの調査の多くは、現在就労している人を対象にしているものが多かった。一方、大学生や中・高校生を対象とする調査の多くは就職と職業観といった働くことだけにターゲットを絞ったものが多かった。しかし、人は働くことだけで人生を構成していない。また、働くことだけのために他の時間を生きているわけでもない。人の人生にとって、時間に主従関係はない。どの時間も人にとってはかけがえのない時間である。この事は、多くの人々が理解しうる事実であるにも関わらず、現実の生活では、「仕事だから」の一言は他の諸事よりも優先性を示す言葉としてある。未だ、就労経験のない子どもたちにとっても、「今日は、お父さん、お母さん仕事だから」という言葉で甘えたい気持ちを飲み込んだ経験は少なくないだろう。

人の社会的態度とは、経験を通して体制化された精神的・神経的な準備状態であり、個人に関わりをもつあらゆる対象や状況に対するその個人の反応に、支持的ないし力動的な影響を及ぼすものである。その態度は「認知」「感情」「行動」の3要素に分類することができる。

本調査においては、これまで触れられてこなかった高校生のWLB態度を対象として行われた。高校生のWLBに対する認知の程度を調べると共に、生徒の親のWLB態度についての認知についても調査対象とした。このことは態度の認知的側面を明らかにすると共に、日常生活で最も長期にわたり深刻な影響をあたえる人生のモデルとしての、父母のWLB行動が世代間連鎖していく過程について検討する目的を持つものであった。その結果から、高校生のWLBについての認知の低さが顕著であったものの、実生活においては、父母の生活スタイルをWLB行動と評価している生徒が多かった。この結果は、他の就労者への直接調査の結果とは異なるものであった。これは、実時間では、やはり就労時間が長く、仕事の優先性も高いが、家族との交流時間や個人の余暇時間にしか、父母と接し得ない生徒たちの実感なのであろう。この認知過程をWLBの認知に対する歪みが生じる原因の一つとしてあげることができるだろう。父母の生活スタイルを見て育った子どもたちは、就労後生徒自身がアンバランスな就労生活を強いられても、「こんな、ものだろう」というアンバランス感覚をバランスと認知してしまうことが危惧される。

第二部では、WLB態度の形成に関わる要因について検討をおこなった。ここでも、やはり日常の家庭での家族間の経験と、学校での適応的な行動といった日常の対人行動が、個人を価値ある存在として認め、援助してくれる人のネットワーク認知に影響をし、その認知を媒介として、WLBの核として家庭生活時間の確保が予測され、家庭生活時間の確保から、他の地域交流や個人の趣味学習そして休養へと、時間の確保が可能となるといった期待を、高校生が有していることが示唆された。

今回の調査は、男女共同参画社会の実現を目標としたWLB態度の形成要因の検討にあった。その中心概念を本調査では性差観とした。WLBの実現には、伝統的性役割観に拘束されない柔軟な役割交換の態度は不可欠である。妻・夫の役割が固定で融通のきかないものであれば、WLBの実現は難しい。家族の中のだれかが犠牲となり、成立している家族の調和は危機にもろく、ダメージの修復も遅く、その傷跡も家族の成員間の信頼に齟齬が生じさせる可能性も否めない。今回の調査においても、所属学校間の差よりも、性別による差がどの調査項

目においても顕著であった。特に直接的に性差観について尋ねた第二部の4では、男女共に外観について性差について偏見を有しており、「能力」「性格」「身体・生理」「行動様式」について、男性生徒が偏見を有していることが明らかとなった。このことは、WLB の抑制要因として性差観が高校生の態度の中に既にあることを示すものであり、今後、学校教育での就労体験において、認知レベルでの WLB の理解と共に、男女の特性と相補性について理解と実体験、そして男女間での共同作業と意見交換を重ねる教育プログラムを開発・実行することの必要性を明らかにしたといえよう。また、窮地に立たされたとき、誰かにたすけを求める態度では、カウンセラーや精神科医といった専門家への援助要請態度は否定的であったものの、やはり家族スキル、学校生活スキルに長け、有用なソーシャル・サポートを有すると認知する生徒は、他者に対する援助要請に対しても、肯定的な態度を有することが明らかとなった。

【終わりに】

本調査が、今後就労する若者たちの WLB 態度形成に寄与することができれば幸いです。

家族社会心理学研究所 主幹 社会学博士 太田 仁

編集後記

今回私たち研究所が、四日市市の男女共同参画課の男女共同参画社会をめざしての調査・研究委託事業へ応募をした時点の2008年春から初夏の頃には、現在のような経済状況に陥るだろうということは夢にも思いませんでした。私たちが委託団体として選択されたちょうどその頃に、世界中を巻き込んだ大不況の嵐が吹き荒れ始めたのです。この研究はまさに絶妙なタイミングで行われたものであると言えるのではないのでしょうか。不況だから、大変な状況だから、ワーク・ライフ・バランスだなどと余裕のあることは言っていられないから、とにかく仕事を見つけて働くのだ！となってしまうのではなく、今だからこそ、働くってどういうことなのか、仕事に振り回されずに生きるってどうすればいいのか、自分の人生の中で大切なものは何なのかを見つめなおす機会としたいですね。これからますます不安定となり、希望が見えなくなる社会へと青少年を送り出す私たち大人、教育団体や行政は、若者が安心して社会へと歩みを進められるように、最大限の援助をおこなう義務があります。今回の調査によって見えてきた様々な知見が有効に活かされていくことを祈り、また私たちも活動を続けていかななくてはならないと改めて思います。

最後に、多忙な時期にもかかわらず、今回の調査にご協力いただいた三校の教職員の方々、そして調査紙に回答をしてくれた学生の皆様に御礼を申し上げます。

2008 年度 四日市市男女共同参画課 調査・研究事業報告書

発行年度 2008 年度
編 集 家族社会心理学研究所
〒510-8001
三重県四日市市天ガ須賀 5-2-9-16
TEL 059-366-3760
FAX 059-366-3760
E-mail; family_social_psychology@yahoo.co.jp
http://www.geocities.jp/family_social_psychology/index.html

発 行 四日市市男女共同参画課
〒510-0093
四日市市本町9 - 8本町プラザ3F
TEL 059-354-8331
FAX 059-354-8339